

カール・ヨルダン著／瀬原義生訳

## 『ザクセン大公 ハインリヒ獅子公

——中世北ドイツの覇者——』

(MINERVA西洋史ライブラ

リー (60)

ミネルヴァ書房 二〇〇四・一刊

A5 三七六頁 五〇〇〇円

原著出版は一九七九年であるが、ドイツ史学界では今なお標準的なハインリヒ獅子公(一一二九/三一、一一九五)伝として評価の高い著作の邦訳である。

一九〇七年生まれの著者カール・ヨルダンは、長らくバルト海に面したキール大学の中世史正教授として講壇に立ち、一九八四年に他界している。彼は獅子公の司教座創設政策で博士号を取得し、MGHシリーズの一部として獅子公発給証書の編纂を行なう一方で、ゲーリハルト版ドイツ史ハンドブック(旧版)の十二世紀該当部の執筆も担当している。長年にわたって微細な史料操作から同時代状況の俯瞰まで篤実な研究を続けてきた著者は、評伝執筆者として最適任者といつてもよい。

獅子公の生涯をほぼ時系列的に叙述する本書は、全体で十二章構成をとる。ハイン

リヒが同名の父傲岸公から受け継いだ歴史的状況の整理(第一章)からはじまる本書は、評者の関心にしたがった読み方を許していただけるならば、三つの視点から叙述

うに変化したのかを示している(第三及び九章)。

以上のような内容を持つ本書では、歴代ドイツ皇帝の中でもその政治的行動において後世に際だつた名を残すフリードリヒ一世の同時代人であつたために、歴史叙述上はやや後景に退いた役割を与えてきた獅子公の生涯が、変動する十二世紀という時代背景と拠点とするザクセンの地政学的環境を十分に加味しつつ生き生きと再現されている。十二世紀のドイツ史そしてヨーロッパ史に関心を向ける者にとっては、我が国では意外に知られることのないドイツの関係史である。ここでは、後ハンザ同盟の盟主となるリュベックの建設やエルベ川以東諸司教座の創設に注目しながら、隣接政治世界への介入をあとづけている(第四章)。もう一点は、同時代人である皇帝フリードリヒ一世バルバロッサとの関係である。ここでは、ハインリヒの従兄弟でもあったこの著名な皇帝が、イタリア遠征と聖地への十字軍を繰り返す一方で、力を蓄えつつあつた獅子公に対する態度がどのよ

を先取りしていふのも間違ふ。ヨルダンの敷いた問題意識は、獅子公没後八百年を記念してブラウンシュヴァイクで設けられた大規模な展覧会のカタログ（J. Luckhardt & F. Niehoff hrsg., *Heinrich der Löwe und seine Zeit. Herrschaft und Repräsentation der Welfen 1125-1235*, 3 Bd., München, 1995）もこれに關わる研究論集（J. Fried & O. G. Oexle hrsg., *Heinrich der Löwe. Herrschaft und Repräsentation (Vorträge und Forschungen LVII)*, Sigmaringen, 2003）の寄稿者に受け継がれてゐる。

評者の見る限り、北欧語の固有名辞表記にやや難点はある（例えは、ゼーラントはショット、ロスカルテはロスキレ、リベンはリーベ、ヴィーボルクはヴィボー）が、全体として大変読みやすい日本語に翻訳されてい、る。「」の重要な著作がドイツ中世史の研究者でなくとも手軽に接することができるので、なうことを持たちは訳者に感謝しなければならない。

（小澤 実）

<p>『百年戦争』 (文庫クセジユ 1864)</p> <p>白水社 1100三・八刊 B 40 一六二頁 九五一円</p> <p>佐藤賢一著</p> <p>『英仏百年戦争』 (集英社新書 0216 D)</p> <p>集英社 1100三・一刊 B 40 一三七頁 六八〇円</p>	<p>フィリップ・コンタミーヌ著／坂巻昭二訳 源」「第二章 エドワード一世の成功（一三一八～六〇年）」「第三章 戰闘の再開と再征服（一三六〇～八九年）」「第四章 長期休戦の期間（一三八九～一四一一年）」「第五章 ランカスター家の企て（一四一三～三五年）」「第六章 戰闘の終結（一四三五～五三年）」「結び 百年戦争の性格とその結果」となっており、一三一七～一四五三年のイングランドとフランスの両王家間の対立抗争を対象とする。これはフィリップ六世によるギュイエンヌ公領の没収に端を発し、カステイヨンの戦いにおけるフランス側の勝利をもつて終結とするもので、われわれに馴染み深いわば伝統的時期区分に従っている。この区分の仕方はフランス人の「百年戦争」觀の反映であるとして、佐藤版の序文「シェークスピア症候群」で対置されるのは、イギリスの文豪の史劇『ヘンリー五世』に典型的に描かれ、今日でも根強く信じられているイギリス人にとっての「百年戦争」觀である。すなわち、エドワード三世のフランス王位請求から始まり、</p>
---	--

まず、それぞれの構成を見てみよう。□

ンタミーヌ版は、「はじめに」「第一章 起源」「第二章 エドワード一世の成功（一三一八～六〇年）」「第三章 戰闘の再開と再征服（一三六〇～八九年）」「第四章 長期休戦の期間（一三八九～一四一一年）」「第五章 ランカスター家の企て（一四一三～三五年）」「第六章 戰闘の終結（一四三五～五三年）」「結び 百年戦争の性格とその結果」となっており、一三一七～一四五三年のイングランドとフランスの両王家間の対立抗争を対象とする。これはフィリップ六世によるギュイエンヌ公領の没収に端を発し、カステイヨンの戦いにおけるフランス側の勝利をもつて終結とするもので、われわれに馴染み深いわば伝統的時期区分に従っている。この区分の仕方はフランス人の「百年戦争」觀の反映であるとして、佐藤版の序文「シェークスピア症候群」で対置されるのは、イギリスの文豪の史劇『ヘンリー五世』に典型的に描かれ、今日でも根強く信じられているイギリス人にとっての「百年戦争」觀である。すなわち、エドワード三世のフランス王位請求から始まり、